

## 【慈訓】 141頁

昔、私が総会所で説教している時、伊吹という念珠屋の前で三人の婦人に出逢った。先方から挨拶するので「見たような方だなあ」と言ったら「東京の築地別院ですよ」そうそうと言ったら「私を覚えていてくださいますか」「袖口が汚れないようにめくって睨み付けて聞いていたから覚えている、何しに来たの」「お説教を聞きに来たのですよ」「それは奇特のいたりですね」「この西沢さんが主人が死なれて淋しいから書物を貸してくださいと言われて、先生の『魂のささやき』を貸してあげたら、この先生は生きておられるでしょうか。生きておられますとも、ご主人がご病気の時、別院で布教された時持つて来られた本ですよ。私は大事をした。どうしたの。主人は俺はもう永くかないと言いますので、そんな気の弱いことを言わないでください。私が元気で買物に出で事故死するかもしれないよ。それならお浄土に先に行った者が蓮華のお座を半座空けて、待っていることにしようと言ったのですが、『魂のささやき』を読んでみると、私たちの信仰は入口で幼稚園位の信仰で、そんな食べたり着たり遊んだりするような低級な宗教ではない。死んで蓮華のお座でお雛さんのように並んで遊んで楽しんでお浄土ではなくて、救われた嬉しさからは衆生済度の活動をしなければならぬと書いてあるが、私たちの信仰はまるきり宗教ではなくてお祈りを聞いているようで、恥ずかしくて仕方がないから八幡に聞きに行くと言われましたから、先生は待つてはおられない、布教に出ておられるかも知れないから速達を出してみなさいと言ったら、電報で京都の総会所にいると言ってきたので、それごらん。京都まで来ていただくではないかと言って四五人のお弟子を休んで貰って、私達三人で来たのです」

「本山のお座敷を拝観したいことはないですか」「お願いします。総会所の説教がすんだら次は何処に行かれますか」「自坊の布教です」「八幡まで行ってもよいですか」「おいでなさい」「次は何処ですか」「丹波市、天理市です」「次に何処に行

「次は紀州の田辺ですが、もうついて来なさんな、貴女のような美人を連れて歩くと問題になりますから」それなら私が預かりましょうかと説教を聞きに来ておられた布教使が言われたから、お願いしますと言って田辺に行つた。

次の晩、お夕飯の時、東京の西沢さんが一寸でよいから面会さしてくださいと取り次いで来た。断つておいたのに来たとなると三定死の境地に立つてきりきり舞いをしているか、あるいは開発してお礼に来たかなと思つて呼びましたら、眼を真っ赤に泣き腫らして次の間から手をついて挨拶をしている。私の胸もスツとした。

「和上さん有難うございました 有難うございました。貴方に捨てられて仏様に拾われました」この一言が開発の総てを物語っているのです。

「昨日、貴方が出発された後、その布教使の方に連れられて十二時まで本堂で懇々と示談して下さるが、そのくらいなことなら知っている、そのご教化も聞いている、ご開山のご苦勞であつて私の心は平氣ではないか、たとい罪業は深重なりとも必ず救うと仰るのだから任したらよいではないか、こちらも任しとうていけないのだけれども、任せられないのだから仕方がないではないか、仏さまの仰ることに間違いはないのだからと必死になつて話してくださいさるけれども、それは話であつて、私は救われてはいないのだと心の底は平氣でいる。貴女ほど強情な者はいない、もう知らないと匙を投げて十二時過ぎに奥に入られた。今度は奥さんが出てきてご教化をしてくださるけれども、男でさえも手に合わないのに、女があんたが言つたくらいで聞くものかいと涙を流しているけれども平氣でいる。これを闡提の機と言うのだろうか、地獄と聞かされても痛くもなければ痒くもない、極楽と聞かされても嬉しくもなければ有難くもない、何ともないけれども安心をしたのでもない、もう私も知らないと言つて二時ごろ奥に入られた。

知つていらぬよ、どうせ助かる代物ではないのだ。それにしても八幡の坊主は怨めしい憎たらしい坊主じゃ、はつきり教えてくれる坊主じゃと信頼して、弟子まで休ませて仕事まで休んで、一大事と思やこそ東京から来ているのに田辺にはもうつ

いて来るなど断りよつた。漸く浮き木に辿り着こうとしているのに振り落とされたではないか、何と無慈悲な糞坊主だろうか、死んでも怨んでやるぞと思う心が腹の底から出て、布教使の言葉も奥さんの話も耳に入らなかつたが、一人になって見ればその心が一層募つて、田辺にはついて来るな、それから先は私は知らない一人で行けとは何と情けない無慈悲な坊主だろうか、手引きをしてくれるのが真の知識ではないか、これだけ煩悶するまで引き出しておいて、それから先は知らない他人の信仰を崩して平気でいる悪魔の坊主ではないか、私はどうしたらよいのだ。

誰も相手をしてくれる者はいないのだ。今噴き出ている怨みと呪いの罪悪や今まで三毒五欲に狂わされていた猛火（怒）や洪水（慾）は何処で防ぐことができるのだ、消すことができるのだ。今無常の風に誘われたら無量永劫流転せねばならないではないか、三世の諸仏に捨てられ、第十八願から唯徐五逆誹謗正法と捨てられたと聞いても痛くも痒くもなかつたが、あの坊主からそれから先は知らない一人で行け、ついて来るなど断られたら方角は立たないではないか、聞いたも知つたも覚え、それは学問であり、ご教化であつて、私の心が晴れていなければたすからないではないか、何れの行も及び難き身なればとても地獄は一定住家ぞかし、私が堕ちなくて誰が堕ちるか往生の望みが絶えた時、無間のどん底に投げ込まれました。あーと言わぬ先に、十劫已来立ち続けた親がいるぞの勅命が腹の底を貫いて、この絶対の悪性の心が親様の一人子であつたのか、先生すみませんでした。――南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と進るお念仏、唯とはこの生地 of 儘でよかつたのか、堕ちなきや助からないのであつた。それに堕ちまい、堕ちまいともがいてるのが自力であつたのか、助かりたい助かりたいとあせつてるのが自力であつたのか、私の思いぶりも聞きぶりも間に合わない、学問も知恵も助けにならない。火を噴く儘が本願の正客であつたのか、先生を恨んで呪うていたがよく捨ててくださった。

もうついてくるかと捨てられた時は第十八願から除かれたと言うよりも淋しく恐ろしかつたが、あれは善知識にたよるな、親様に逢えと言う先生の慈悲であつたのか。八幡の方は何処か方角はわからないのに、先生すみませんでした、すみません

でした、とわんわん泣いているので、夫婦共に飛び出して、よかつた よかつた すべてがつきて思慮分別を超越した処に不思議の仏智が作用してくださいと喜んでくださったが、まるで腑抜けのように茫然として立ち上がり、唯であつた、唯であつた、三千世界は唯であつたと踊り舞をし、今度は頭を畳にすりつけて、申訳がありません申訳がありません。よくも口が裂けなんだこと、よくも大地が割れなんだこと、この無限絶対の悪性を捨てず裁かず、おお苦しかり、久遠劫からの自力の執着は離れ難いのじゃぞ、三悪道にひた走りするのは易いが、仏の方に向いて進むのは難中の難じゃぞと私の毒づく悪性の儘を無条件で摂取してくださいと、不思議の中の不思議。法を仰げば愈々尊く、機を見れば愈々愧しく、死んで救われることだとばかり思っていたが、今救われたとはこれが平生業成ではないか、自由の天地、無我の境地があると言われるのはこのことか、善も欲しからず、悪も恐れなし、この身の儘が本願や行者、行者や本願とは、私の儘が南無阿弥陀仏、私を離れて弥陀がない、弥陀を離れて私がない、息する儘が南無阿弥陀仏、ああどうしようどうしよう。こうまでせねば私の本性はわからないのでしたか、先生が来るなど仰つたのは私を激励する為であつたのか、お礼を申し上げねばならないから行こう。

恨んで 呪うて 腹を立てさせて 真剣に求道させてくださったのか、先生の善巧方便であつたのか、先生に捨てられて仏さまに拾わされたのだと、紀州の田辺、方角はわからないけれども 行けば逢えると思つたから出ましたが、丹波市から遠いですね。駅に着いても尋ねる人がない。店員風の人が駅から荷物を発送して、今自転車に乗ろうとする人に 『こんなことを尋ねたら馬鹿か気狂かと思われましようが、町も寺も何にも知らないのですが、大沼法龍という先生が何処かで説教しておられる張出しか広告を見られませんでしたか』 『あああの人なら私の店の向こうの方の寺であるかと立看板が出ていましたよ』 『やれ嬉しや、連れて行って下さいませんか』 『お荷物をこの自転車にお載せなさい』 と言って門の前まで連れて来て下さいました。全く仏様が道案内を差向けて 荷物まで持つて来てくださったのだと感謝いたしました」と泣き泣きお念仏を称えてい

ました。先生有難うございましたと泣き伏しているのです。

「有難うありがとう。実地に難中の難の峠を越す人が稀だから稀有最勝の浄信と言うのです。聖人様がただ念仏してと仰ったのは、その境地を突破さしていただいた妙境を仰ったので、普通の聞き方をしている人が言ってるような只とは桁が違うのですよ。八万の法蔵を読み破った無限の喜びのある唯ですよ。よく来てくださった、あの儘で帰京されたらどうしようかと思っていました、仏さまの念力は強いですね」

次の年の御正忌には八幡に参詣してお齋のお手伝いをしていました。そして喜ぶよろこぶ「先生死んでからの百味の飲食でなくても健康に恵まれて働いていただいている御飯が百味の飲食でした。着せていただいている着物が天地の恵み、宇宙の恵みですから応法の妙服でした。住んでいる家は宮殿楼閣の思いがします」と喜んでいきますから、その通り、死んだ先は仏様が連れて行かるるのだから、凡夫が世話を焼くことはいらない。今が仏さまと一体だから今を楽しんだらよいのです。山川草木も鳥の囀る声までが仏様が私を楽しませてくださる天然の言葉です。仏法を聞き開けば、毎日が好日です。

ある時手紙が来た。最近妻を失って困っておられる南沢と言う知人から所望されて困っているのですが、主人が死ぬる時、先に死んだ者が半座をあけて待っていると約束しているのですが、破ることになるがどうしたものでしょうか。

「そんな約束をするから困るのだ、よく聞きなさいよ。印度では蓮華が花の王様、日本では桜、中国では牡丹、西洋ではバラ、タイ国ではケシ、それぞれの国に花の王様があるのです。蓮華とは卑湿の淤泥の中でなければ花は開かないのです。私の貪瞋煩惱の濁水の中に仏さまの清浄真実の信仰の華が開くのに譬えたのです。信仰の疑いある人は蕾、信樂開発した人は華が開いたのです。お内裏さんのように皴もぶれの爺と婆が並んで座ったら笑い者ですよ、半座を分けておかねばならぬような狭苦しいお浄土と思えますか、古汚い毛虫でも胡蝶となって神通自在で飛び歩くではありませんか、喩話にこだわってはいけません。俺はお前との約束を守って半座をあけて待っているぞと睨んではいません。先方の人も困っているのです。心

の中で菩提を弔いつつ結婚して助けてお上げなさい。貴女は前生で南沢さんと結婚しようとしていたのかもしれませんが。開発したあなたの信仰なら何処でも家庭を浄化することができますのです」

今は南沢の主人も喪くなって長野県で入寺して献身的に布教しておられる。主人を失った逆縁がご縁となって、総てを乗切る威神力をいただいで衆苦充滿の中で感謝の生活をしておられます。